

●発行日：2019年6月15日（土）

〒661-0035 兵庫県尼崎市武庫之荘3-19-3 TEL 06-4962-5876 FAX 06-4962-5877 e-mail info@gakurin.co.jp

発行:教材出版 学林舎



2019年教育の行き先 新学習指導要領による 学習評価について

小学校は2020年度から、中学校は2021年度から「新学習指導要領」が実施されます。情報化や技術革新、グローバル化が急速に進む社会において、子どもたちが生きるために必要な力を育成することが学校教育には求められています。「新学習指導要領」は、この社会で「生きる力」を一人一人の子どもたちに確実に育成することを目指し、各教科などにおいて、次の3つの資質・能力を育成することを掲げています。

- ・ 実際の社会の中で生きていく「知識及び技能」
- ・ 未知の状況にも対応できる「思考力、判断力、表現力等」
- ・ 学んだことを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力、人間性等」

それでは、この「新学習指導要領」による学習評価はどのようなものになるのでしょうか。

学習評価には、各教科の学習状況を分析的に捉える「観点別学習状況の評価」と、これらを総括的に捉える「評定」、そして「個人内評価」があります。

「観点別学習状況の評価」とは、学習指導要領にあげられた「教科の目標」をどれだけ達成できたかの評価です。たとえば、小学5年生の社会の目標に「我が国の国土の様子、国土の環境と国民生活との関連について理解できるようにし、環境の保全や自然災害の防止の重要性について関心を深め、国土に対する愛情を育てるようにする」とあります。この学年の教科目標に対し

て、授業を通して、子どもたちがどのように学習し、達成できたかが評価されます。その評価方法が観点別になっており、その観点とは「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」「主体的に学習に取り組む態度」の3つです。掲げられた学年の教科目標に対して、どこまで「知識及び技能」が身につけられたか、身につけたことからどこまで「思考力・判断力・表現力等」を深められたか、また、どれだけ「主体的に学習に取り組む態度」がみられたかが評価されます。具体的な評価の方法としては、ペーパーテスト、論述やレポート作成、発表、グループでの話し合い、作品の制作など様々な活動が取り上げられます。それぞれの観点でA(十分満足できると判断されるもの)・B(おおむね満足できると判断されるもの)・C(努力を要すると判断されるもの)の3段階で評価されます。3つの観点によって「AAA」や「CAB」などと評価されます。しかし、この「観点別学習状況の評価」では捉えきれない面が多々あります。子どもがもつ感性や思いやり、可能性、進歩の状況などです。これらを画一的に評価することは難しいため、「個人内評価」として記載されます。

この「観点別学習状況の評価」をもとに、総合的な学習状況を示すものとして「評定」があります。評定は各教科の成績として５段階（小学校は３段階）で示されます。「評定」は各学期末に通知表（あゆみ）に記載されて、子ども・保護者に通知されます。また、「評定」は調査書に記載され、公立高校の入試の合否判定の一資料となるため、厳密な公正さがもとめられます。現在の評価・評定の方法が必ずしも万全なものとはいえない点もあり、より客観性をもった評価方法の検討の必要性も唱えられています。

学習評価は子どもの学習の達成度を示すものです。保護者はその結果を、子どもとともに確認しましょう。よく達成できたところは大いにほめ、子どものがんばりを認めるようにしましょう。また、努力を要する部分

については、子どもと、これからどのようにがんばっていくかを、前向きに話し合う姿勢が保護者として大切です。学習の評価は子どもの一面の評価です。すべてではありません。学習の評価を子どもに関する資料の一つとして捉え、子どもたちが未来を明るく生き抜いていける力を学校と家庭で協力して育んでいくことが大切です。

(文／学林舎編集部)

2019年学習の行き先 日本語を考える

「ロッカールームで、主将はやおら立ち上がり、チームメートに檄を飛ばした。」

この一文で述べられているのは、主将が急に立ち上がって、チームメートを活気づけた様子……ではありません。主将は「やおら(=ゆっくりと)」立ち上がり、チームメートに「檄を飛ばした(=自分の主張を伝えて同意を求めた)」のです。

「やおら」「檄を飛ばす」の意味について、平成29年度の「国語に関する世論調査」(文化庁)で、次のような調査結果が発表されています。

選択肢から「やおら」の意味を正しく選んだ人は39.8%。誤って選んだ人は30.9%。

・平成18年度では、正しく選んだ人は40.5%。誤って選んだ人は43.7%。

選択肢から「檄を飛ばす」の意味を正しく選んだ人は22.1%。誤って選んだ人は67.4%。

・平成19年度では、正しく選んだ人は19.3%。誤って選んだ人は72.9%。

・平成15年度では、正しく選んだ人は14.6%。誤って選んだ人は74.1%。

これらの結果から、言葉の意味を正しく理解している人の割合はおおよそ増加傾向にあり、誤って覚えている人の割合はおおよそ減少傾向にあることがわかります。つまり、言葉の意味を正しく覚えるという観点では、日本人の日本語能力は、この10～15年で向上して

いるといえるでしょう。

ただし、同じ「国語に関する世論調査」の中で、気になる結果もあります。「溜飲を下げる／溜飲を晴らす」のどちらが正しい使い方か、という調査では、次のような結果が出ています。

選択肢から「溜飲を下げる」という正しい使い方を選んだ人は37.4%。「溜飲を晴らす」という誤った使い方を選んだ人は32.9%。

・平成19年度では、正しい使い方を選んだ人は39.8%。誤った使い方を選んだ人は26.1%。

正しく選んだ人の割合が少し減り、誤って選んだ人の割合が6%以上増えています。つまり、10年前と比べて、日本語を正しく使えているかという観点では、日本語能力は向上していない、あるいは低下しているように見えます。日本語を正しく覚えて知識として定着させること、つまりインプット能力には一定の成果が出ている一方で、覚えた知識を正しく使うこと、つまりアウトプット能力は下がっている可能性があるのです。

2019年4月に実施された全国学力調査において、小学6年生の出題では報告する文章やインタビューなどが、中学3年生の出題では新聞の紙面や意見文の下書きなどが、国語の問題の素材として扱われています。これまで以上に、言葉の意味を含む知識や読み取った情報についての、いわゆる活用力を求める出題が、全面的に押し出されているのです。

日本語を活用する能力が、現代における日本語能力として求められているのだとすると、先に述べた「国語に関する世論調査」で、言葉の使い方を誤る人の割合が増えているという結果が出ていることは、深く受け止める必要があるといえます。

「PISA型読解力」「非連続型テキスト」などの言葉が教育現場で取り上げられるようになってしばらく経ちますが、現代に必要とされている日本語能力が日本人に定着しているというには、まだ不十分なようです。いま一度、覚えた言葉をいかに正しく活用するかという観点で、日本語教育について見直してみる必要があるでしょう。

(文／学林舎編集部)

2019年教育の行き先 留学から進学へ ー海外の大学に進学する

昨今、海外“進学”を推奨する高校が増えてきています。令和となった現代の大学受験は、国内にとどまらず海外にも目を向けられており、グローバル化の波は大学受験にも押し寄せているといえるでしょう。

当然のことですが、海外の大学に進学するためには、日本の大学受験とはまったく違う行程や手続きなどを踏むことになります。とてもハードルが高い印象を受けるかもしれませんが、しくみさえわかればそれほど難しいことはありません。今回は、アメリカの大学に進学することを想定し、そのしくみや注意点をまとめました。

○アメリカには大学入試がない

驚くことに、アメリカでは日本のように試験会場で入学試験を受けるということがありません。アメリカの大学に進学するには、大学から求められる願書や高校成績証明書(GPA)、卒業証明書などの書類を提出し、あとはその審査結果を待つだけです。つまり、受験勉強をする必要がないのです。ただし、審査については高校3年間を通しての成績が重要視されるため、高校入学から卒業までの間、英語はもちろんのこと他教科の成績も高く維持し続ける必要があります。日ごろの積み重ねが非常に大切だということです。

○英語が苦手でも合格の可能性はある

アメリカの多くの大学は、留学生の入学条件に、英語力判定テスト(TOEFLなど)のスコアを提出するよう求めています(最近では、英検の成績を提出してもよいとする大学も増えてきています)。実際に入学してから英語力に支障があれば困るので、これは当然のことですが、出願時点で英語力が不足していたからといって、合格の見込みがまったくないわけではありません。英語に自信がなく基準に満たない場合でも、その他の教科の成績や基準がクリアできていれば合格できる「条件付

き入学」という制度があります。この場合の「条件」というのは、大学入学後に指定の英語学校などで4か月から1年間英語力を鍛えて、入学基準のレベルまで引き上げることです。また、合格基準の高い4年制大学ではなく、比較的合格しやすい公立の2年制大学(コミュニティカレッジ)の「4年制大学編入コース」に入学し、3年次から4年制大学に編入するという方法もあります。はじめから4年制大学に進学するよりも学費が抑えられることから、実際に多くのアメリカ人の受験生も採用しているもっとも一般的な入学方法です。

○入学のチャンスが年に数回ある

一般的に、アメリカの大学は9月から新学年が始まり、そこから翌年5月までを1学年としています。ちなみに6～8月は夏休みです。また、学期は1年を2つにわけた2学期制(セメスター)や、3つにわけた3学期制(トライメスター)、4つにわけた4学期制(クォーター)があります。入学は学期ごとにできるので、日本の大学との併願も可能です。前述したとおり、アメリカの大学受験は審査のみなので、アメリカの大学に出願したあとは日本の大学受験に専念することができます。

○事前に学部や専攻を決める必要がない

日本の大学受験は、事前に学部や学科を選んで出願する必要があります。一方でアメリカの大学では、はじめの2年間は一般教養課程(リベラルアーツ)を履修し、3年次から専門課程に入るのが普通です。つまり、まだ将来のことや学びたいことが決まっていない学生も、入学してからじっくり将来について考える時間を持てるのです。また、アメリカの大学では、複数専攻することができたり、途中で学部を変更できたりと、日本の大学と比べてかなり自由度が高いのも特徴です。

このように、日本の大学と比べて受験しやすいことから、海外への進学を視野に入れるケースが増えていきます。グローバル化が叫ばれて久しい現代において、選択肢の1つとして考えてみるのもよいのではないのでしょうか。

(文／学林舎編集部)

クロスロード Crossroad

第 94 回 | 文／吉田 良治

● 体罰問題

2012 年に発生した大阪・桜宮高校バスケットボール部の生徒への体罰による自殺事件以降、日本のスポーツや教育の指導の現場での体罰に対して、厳しい対応が始まりました。体罰、つまり暴力で若者をしつけるという、日本に根深く残る負の歴史は、そろそろ改善させるべき時期にあるということで、国中で体罰を取り締まる動きが強まりました。ちょうどその時期は 2020 年のオリンピック招致の最終段階で、東京が立候補していた関係で「日本のスポーツ界に根深い体罰の文化が、オリンピック招致に悪影響が出るのでは」と、国も躍起になって火消しに回りました。しかし、長年続いた負の歴史はそう簡単に変えることは困難です。その後もスポーツ界はもちろん、教育の現場、最近では家庭での子供の躾と称し、児童虐待も深刻化しています。先月は兵庫県尼崎市の私立尼崎高校の複数の部活で体罰の報道がありました。中には全国優勝するような強豪スポーツも含まれ、体罰がないと強くできない！という、未だに暴力を用いて指導するスポーツ指導者が存在していることが明らかになりました。暴力はいかなる理由があっても犯罪です。犯罪を用いてスポーツや教育の指導の現場、そして家庭で躾をすることは、ある意味その指導は破綻しているといえます。暴力という反社会行為で正しい指導などありえません。そのことを自覚し、正しい指導法を身につけることが、スポーツ、教育の指導者、そして親がまず身につけるべき術となります。

現在 PHP 研究所ではスポーツコンプライアンス・パワハラ防止のテキスト“実践！グッドコーチング”を制作しています。ケーススタディをもとに、パワハラや体罰と認定させるのはどういうケースなのか、まずは

法的にアウトになる行為を理解することが目的になります。自動車の運転で例えれば、ブレーキを踏むことがこのテキストの役割となります。スポーツ庁や日本スポーツ協会などが製作協力しており、私も指導者の立場でどう改善するのか、その方向性をこのテキストの中で共有しています。今後日本スポーツ協会加盟のスポーツ競技団体や、今年設立された大学スポーツ協会・UNIVAS などを中心となり“実践！グッドコーチング”を用いた取り組みやプログラムの開発とその提供が進んでいくことになると思われます。

ブレーキを踏むことだけでは指導者が成長できません。指導者が正しく成長するためにはアクセルが必要です。私は独自にスポーツマンシップマインドを育むテキスト、“スポーツマンシップ・フィットネス 1.0”を作成しました。自動車の運転で例えるとこのテキストがアクセルを踏み込むことに当たります。“実践！グッドコーチング”は体罰やパワハラにならないためにブレーキ踏む、“スポーツマンシップ・フィットネス 1.0”は正しい指導に思いきりアクセルを踏む、この両輪が兼ね備わって初めて正しい指導法が確立されていきます。

これまで体罰やパワハラといったネガティブな思考回路しか持たない指導者には、体罰やパワハラを用いないで指導できるために、新たな思考回路を開く必要があります。“実践！グッドコーチング”と“スポーツマンシップ・フィットネス 1.0”がともにその持ち味を生かしながら、令和(美しい調和)の時代に合った指導法の確立と、思考回路の開発に役立てていただければ幸いです。(つづく)

吉田良治さんプロフィール

1962年生まれ。1998年にワシントン大学へアメリカンフットボールコーチ留学。2000年リーグ制覇、2001年ローズボウルに出場し、ローズボウル制覇に貢献。国家レベルのリーダーシップ教育に貢献した、ランブライト元ワシントン大学ヘッドコーチよりリーダーシップ教育を学ぶ。全米の大学で人格形成プログラム普及に貢献した、ライス元ジョージア工科大学体育局長よりライフスキル教育を学ぶ。

吉田良治さんBlog <http://ameblo.jp/outside-the-box/>